昭和四十四年二月

帯隈山
神籠石

東北部調査概報

佐賀市教育委員会

史跡帯隈山神籠石景観（東より望む）

史跡帯隈山神籠石・例石（東北斜面Ａ・Ｂ区）

発刊にあたって

神籠石は、山口・福岡・佐賀の三県に八ヶ所発見されているにすぎない学術上極めて貴重な存在であり、将来の文化向上と発展の基礎となるものであります。

さて、逐年の人口過密による目ざましい宅地造成や、農業構造改善事業の一環である柑橘園造成などにより、文化財の置かれている環境は年々侵蝕されてきている現状であります。

幸いにも本市では、国・県の援助により史跡神籠石の第一次緊急調査を昭和三十九年実施し、その遺構を究明、さらに今回第二次として指定地域内の東北部とその周辺を発掘調査し、多大なる資料蒐集が行なわれたのであります。

今回の貴重な埋蔵文化財の調査に当っては、県教育委員会、佐賀大学考古学部員、並びに地元関係各位のなみなみならぬご支援ご協力はもとより、調査員の献身的ともいうべきご熱心なる調査に対しまして、心からの敬意と感謝の誠を捧げる次第であります。

このたびの調査刊行が関係学界に、いささかでも貢献することができますならば、われわれの本懐これに過ぎるものはありません。

今後は市といたしましても観光と結びつけ埋蔵文化財の保存顕彰に十分力をそそぎたいと存じておりますので、この上とも一層のご支援をお願い申し上げ発刊の言葉に代える次第であります。

昭和四十四年二月

佐賀市教育委員会

教育長　伊藤一男

目次

一、帯隈山神籠石の概要……一頁
二、昭和四十三年の調査経過……一頁
三、昭和四十三年の調査概要……六頁
(一)調査箇所……六頁
1. 列石線の調査
2. 列石線の精密調査
3. 土塁の調査
4. 内部遺構の調査
5. 北門址付近の調査
6. その他の調査
(二)列石線……一〇頁
(三)列石線の外側……二一頁
(四)列石線の内側……二三頁

（五）土塁……三三頁
（六）北門址……三九頁
（七）内部遺構……四二頁
（八）陶棺……四七頁
四、総括と考察……四八頁
（一）列石と木柵……四八頁
（二）列石の運搬と配列……五四頁
（三）採石地と北門址……五五頁
（四）神籠石の主要施設……五七頁

一、帯隈山神籠石の概要

佐賀市久保泉町川久保に位置する帯隈山は、脊振山脈の南麓に派生した標高一七八メートルの小独立丘であって、東端の一部は神埼郡神埼町に属している。この帯隈山に神籠石が築成されていることが発見されたのは、昭和十六年のことであって、それ以後列石線の調査が続けられて、約三分の一の推定線を含めほぼその全貌が明らかとなった。吉村茂三郎・松尾禎作・七田忠志「帯隈山神籠石」（昭和二十六年三月、佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第十輯）にその経過や概要が記されている。

昭和二十六年六月九日、史跡に指定されたが、昭和三十六年には東南端に位置する天童山が密柑園造成のため開墾された。昭和三十九年には、列石線内の南斜面の大半が密柑園造成のために開墾されることになり、その開墾に先立ち開墾予定地内の列石線および内部遺構の緊急調査が実施された。この調査結果は、鏡山猛「帯隈山神籠石」（昭和四十二年三月、佐賀県教育委員会および佐賀市教育委員会発行、帯隈山神籠石とその週辺）に登載されている。列石線の三分の二は、その位置が確認され未確認地区は北部の三分の一余りとなった。しかし、ブルトーザーによって開墾され、密柑園と化した帯隈山は、山容変じて史跡としての景観を相当に損じていることはいうまでもないことである。

二、昭和四十三年の調査経過

史跡帯隈山神籠石が所在する付近一帯の丘陵は、密柑園と化しているが、帯隈山も大半は密柑園となり、列

石線は密柑園の中をめぐっていて、北部の一部が僅かに原状をとどめているに過ぎなくなっていた。ところが未開墾地の中の東北部が密柑園造成の対象となり、土地所有者から開墾のための現状変更許可申請書が昭和四十三年の初頭に提出された。

管理団体である佐賀市教育委員会は、文化庁文化財保護部の指示によって、現状変更許可申請地域の緊急調査を実施することになり、佐賀市教育委員会内に帯隈山神籠石緊急調査委員会を設け、調査に当ることになった。この緊急調査委員会の構成は、次のとおりである。

会長	佐賀市教育委員会教育長	伊藤一男
顧問	佐賀大学学長	田中定
	九州大学文学部教授	鏡山猛
	佐賀県教育委員会社会教育課長	白浜春次
事務局長	佐賀市教育委員会社会教育課長	清水礼太
庶務会計係長	佐賀市教育委員会文化財係長	宮崎昌治
庶務会計係	佐賀市教育委員会社会教育課	石動丸昭子
調査委員長	佐賀県教育委員会文化財係長	木下之治
調査副委員長	佐賀市文化財専門委員	尾形徳之
調査員	佐賀市教育委員会文化財係	北原学
	同	杉町義典
	佐賀県教育委員会文化財係	安本雪男

同　　　　　　　　　　　紫元静雄
佐賀県文化館学芸課　　　中村勲
佐賀県立図書館資料課　　森醇一郎
佐賀市久保泉公民館長　　山本清吾
佐賀市金立公民館主事　　古川文士

調査補助員　　佐賀大学考古学研究会
前田武志・宝蔵寺博・正木勝利・山口登・広政直彦・瓜生治・古賀紀裕・
大坪賢市・矢ヶ部定次・橋本泰博・藤井要・原崎寿・三川孝信・桝谷秀秋
岡村康博・中西義裕・松崎光洋・大串武司・岩永泰嗣・池田正明・幸田邦登・
中島直幸・貞島昇二郎・城紀子・権藤けい子・宇野ひさみ・木下ちさと・
船津丸ひろ子

調査は、七月十日から開始し、七月三十日をもって終了することにした。調査日程の概要は、次のとおりである。

七月十日（水）小雨　　午前十時より佐賀市久保泉町川久保の勝宿社境内において、地鎮祭を挙行し、調査団本部である「おちつき旅館」で参列者一同会食をなす。午後二時半、調査員は小雨をついて帯隈山の北麓から神籠石の北門址に登り、調査地区の現地踏査を行ない発掘調査の具体的検討を行なう。北門址への登り道は臨時に設けられたものであるため、急勾配であるばかりでなく、竹や草木が茂って極めて悪路である。この登山道の道作りを行なったが、その作業中に宝蔵寺博が竹の伐り株で負傷した。

七月十一日（木）曇　　北門址から列石線を確認しつつ、列石線の上下の雑木・雑草の伐採作業を行なう。列石が落下して欠失している部分もあって、列石線の確認は容易でなく、また、女竹が繁っていて伐採作業も困難を極め、調査予定地区のほぼ半分の伐採を終えたにすぎなかった。

七月十二日（金）曇　　列石線の確認に相当に苦しんだ箇処もあったが、伐採作業は完全に終了した。作業は昨日に続き重労働であったため全員疲労した。

七月十三日（土）晴　　本日から列石を出す列石線の発掘にかかり、五班編成でA・B・C・D・Eの五区の発掘を行なった。A区は土塁の切断、B区とD区は精密調査区設定のため作業が進捗せず、C区のみ発掘を完了した。

七月十四日（日）雨　　発掘作業を中止し、作業日程や発掘方法等について検討を加え、明日からの調査計画を新しく立て直した。

七月十五日（月）曇　　列石線の発掘作業は、H区まで進み、BとHの二区が未了で他は一応終了した。A区の土塁下層の二箇所から焼土と木炭が発見され、北門址より土師器片一箇が出土した。また、B区の精密調査区から陶棺が発見された。

七月十六日（火）曇　　列石線の発掘作業完了し、陶棺出土地の実測を始める。強行作業のため調査員は疲労がはげしく、弁当や飲水の運搬にも苦労した。

七月十七日（水）曇　　K区で列石線の外側と内側の二箇所の精密調査作業をなし、L区で土塁の切断作業を行なう。また、GH区南方の列石線内部で遺構調査のための発掘を開始した。A区・A区の土塁・B区などの実測を行なう。

七月十八日（木）晴　Ｌ区の土塁切断・ＧＨ区南方の遺構調査完了、帯隈山頂上の遺構調査のためトレンチを設定して発掘作業を始めた。列石線の実測はＤ区まで終ったが、晴天のため調査員の疲労は加わり、飲料水の需要は増して水運搬に苦労する。夜は、神籠石についての自由討論会を催した。

七月十九日（金）晴　帯隈山頂上の発掘を継続し、ＧＨ区南方の発掘を再度行ない発掘区域を拡張す。列石線の精密調査区の実測を継続して行なった。

七月二十日（土）晴　Ｌ区の土塁切断作業を再度行ない、Ｌ区で木柵孔の精密調査を実施する。ＧＨ区南方のトレンチ内から土師器片二箇が発見されたが、遺構は確認できず、また、帯隈山頂上からも遺構は発見されなかった。北門址の外側にトレンチを設定して発掘を開始し、土師器の把手一箇と細片一箇を発見した。精密調査区の実測は終了し、列石線の実測を継続した。

七月二十一日（日）晴　発掘作業は、本日をもって終了し、列石の採石場と推定される帯隈山の北側至近に位置する山丘の調査を行なう。実測作業は完了せず、夜、調査団本部に於て調査員は反省懇親会を催した。

七月二十二日（月）晴　実測班のみ残留して、他の調査員は帰宅す。実測班は、実測作業を継続した。

七月二十三日（火）晴　実測作業は本日をもって終了し、用具類はすべて運搬する。

七月二十四日（水）晴　調査団本部で実測図の整理作業を行なう。午後、調査員は全員引揚げ、調査団本部を解散した。

七月二十五日（木）晴　本日から実測図や調査記録の整理作業を始めるとともに、経費等の清算事務に当ることにした。

三、昭和四十三年の調査概要

(一) 調査箇所

帯隈山神籠石の東北部に当たる未開墾地区であって、植林がなされていたため列石線は推定にとどまり、調査は実施されていなかった。この地区は、北門址からその東南方に当る昭和三十九年に発掘調査が実施された地区までの直線距離で約三〇〇メートルの間であって、この神籠石では標高の最も高いところを列石がめぐっている地区である。

1. 列石線の調査

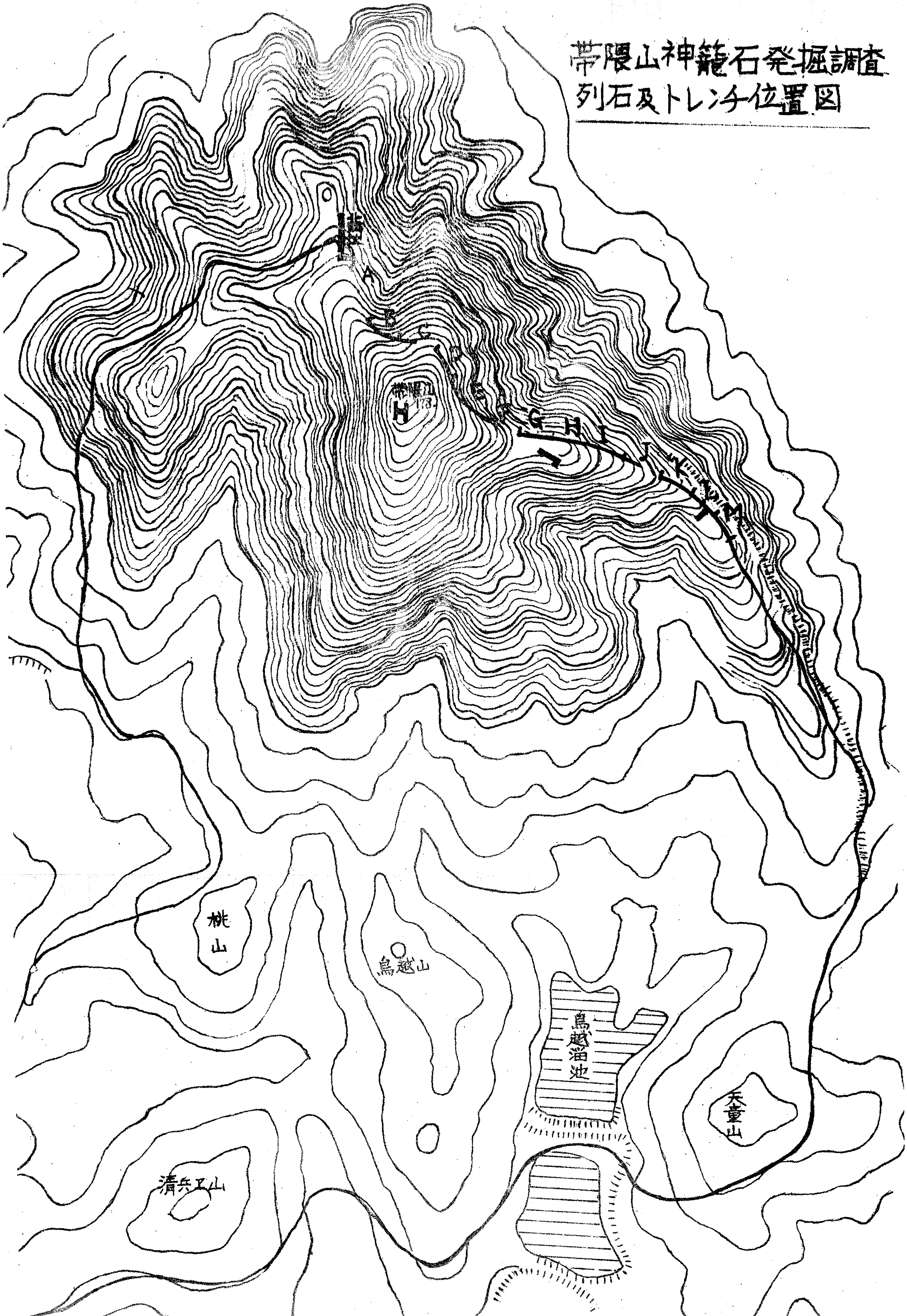
列石線が確認されていない地区であるため、列石線を確認するということが調査の重点となった。この神籠石では、斜面の勾配が最も急なところを列石線が通っているため、列石の自然落下に伴のう欠失箇所が五箇所も存在していた。列石線の保護のため、列石はその上端を僅か一〇センチメートル余り露出させるにとどめたが、列石の構造を知るために上端の奥行は全面的に露出させることにした。また、将来の再検討の必要を考慮して、延長三四メートルに及ぶ保存区七箇所を設定し、現状のまま未発掘で残すことにした。

2. 列石線の精密調査

列石線の構造を明らかにするため、精密調査区を設定して、列石線の外側および内側の調査を行なった。列石線の外側の調査は五箇所、内側の調査は一箇所で、他に欠石箇所の裏込石の調査を一箇所実施した。

列石線の外側の調査は、すでにおつぼ山神籠石(武雄市橘町小野原)や昭和三十九年に行なわれたこの帯隈

帯隈山神籠石発掘調査
列石及トレンチ位置図



山神籠石で実施され、木柵孔や添石などの配置が明らかとなり、その報告書も発行されているが、帯隈山神籠石の最高所にある列石線の構造も同一であるかどうかを確認するために実施した。また、列石線の外側の勾配の状態や、列石が築成当初どの部分まで露出して立てられていたかという点の究明にも意を注いだ。列石線の外側に対し、その内側の構造については比較的に等閑視されてきたように考えられるので、この内側の構造を明らかにする必要を感じ調査に当った。

3. 土塁の調査

この土塁についても、その構造や規模については、すでに調査が行なわれているが、今度も調査区の両端に近い二箇所を選定して、列石線にほぼ直交するよう土塁を切断して、その構造や規模を調査した。

4. 内部遺構の調査

この神籠石では、最高所に位置する帯隈山頂上とGH区南方の比較的に平坦な地勢となっている二箇所を選び、トレンチを設定して内部遺構の調査を実施した。

5. 北門址付近の調査

北門址の内側は、昭和三十九年にすでに調査されているが、その調査区域を拡張するとともに、門址の外側が平坦な地勢となっているため、トレンチを入れて調査を行なった。

6. その他の調査

B区の精密調査区から偶然に発見された陶棺の調査を実施するとともに、列石の採石場の調査に当った。

(二)　列石線

今度の調査区は、帯隈山神籠石の東北部に当り、北門址から昭和三十九年に調査した列石線までの間で、直線距離で約三〇〇メートルである。この地区の列石線は、帯隈山の頂上近くの北側をめぐっているため、この神籠石の列石線では最高所に位置していて、標高一一五メートルから一六四メートルの間にある。

調査区の列石線は、傾斜面をほぼ直角に近く横切って構築されており、傾斜面の勾配が大きいために列石の自然崩壊による欠失部分が五箇所存在していた。調査区をA区からM区まで一三区に分けて調査したが、列石線の概要は次表の「帯隈山神籠石列石線調査一覧表」のとおりである。

帯隈山神籠石列石線調査一覧表

区分	現存調査列石線	欠石部分推定	転石部分	保存区	合計全長	実長	調査列石数	上面に立上りのある列石数	1メートル以上の列石数
A区	19米80	33米20	0米	0米	53米00	54米14	27	13	3
B区	23.50	0	1.00	0	24.50	24.95	33	15	4
C区	14.45	13.60	.50	1.35	29.90	30.30	23	2	2
D区	20.00	0	0	0	20.00	20.15	30	11	3
E区 F区	38.20	18.50	0	4.60	61.30	63.50	57	15	3
G区	21.40	0	0	0	21.40	21.69	33	3	1
H区 I区	38.60	0	0	6.80	45.40	46.48	57	17	2
J区	10.60	13.60	0	3.20	27.40	28.90	18	6	1
K区	19.70	0	.60	3.50	23.80	24.40	31	20	1
L区	13.60	3.00	0	4.30	20.90	20.98	20	17	4
M区	8.07	0	0	10.83	18.90	19.00	13	7	0
計	227.92	81.90	2.10	34.58	346.50	354.49	342	126	24

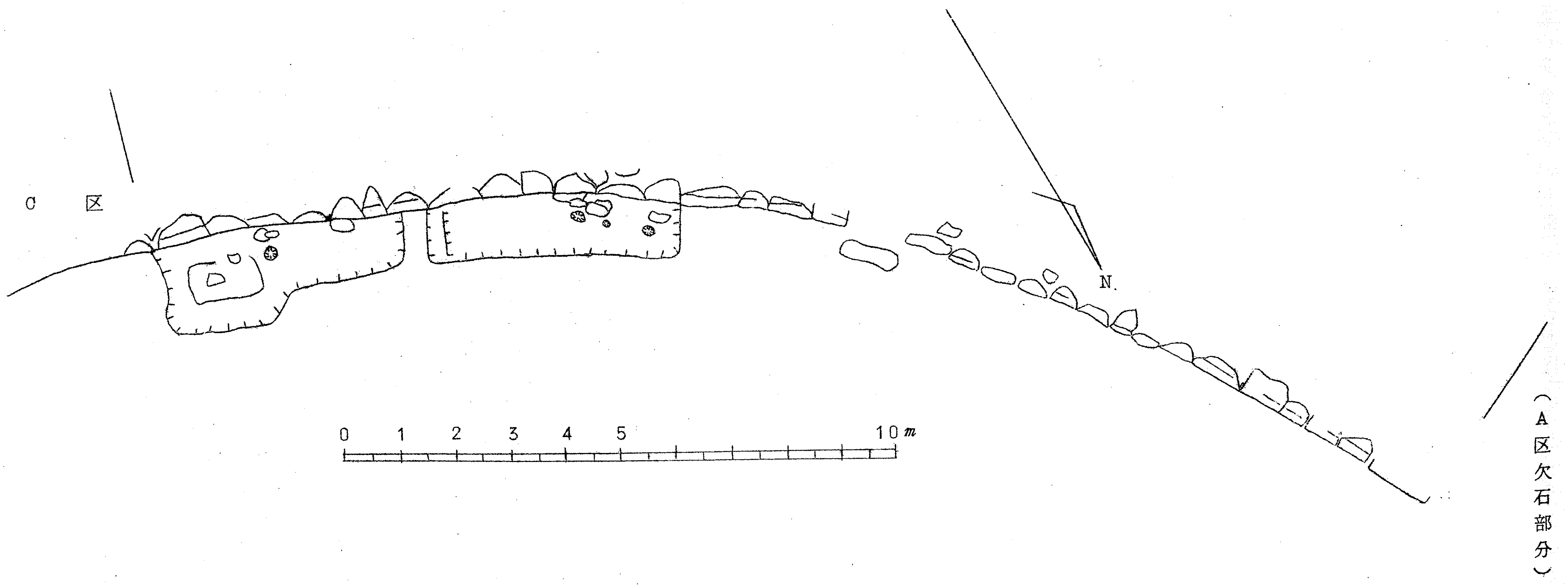
この調査区の列石線の全長は、欠石部分の推定を含めて三四六メートル五〇センチで、この中、欠石部分の推定線が八一メートル九〇センチであり、列石線全長の実長は三五四メートル四九センチである。

列石にはすべて花崗岩が用いられていて、上面・前面・両側面の四面がのみをもって整然と加工され、列石の上面前端の陵線をそろえて並べられている。列石前面の高さは、六〇センチメートル内外で、すべての列石が一定しているが、長さや奥行はそれぞれ異なっている。これは陵線をそろえることに重点をおいて列石線が構築されていることを意味するものであろう。

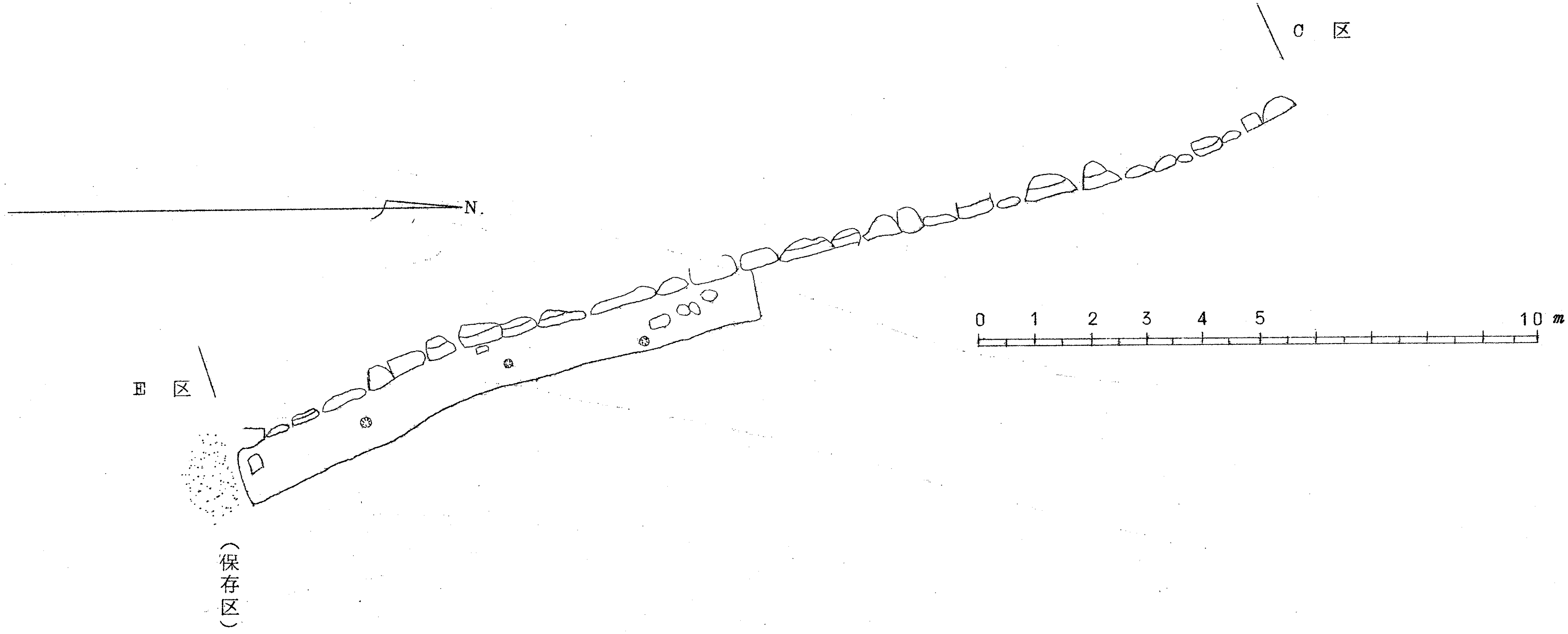
列石の調査箇数は三四二箇で、転石を含めての列石の長さは合計二二八メートル余りあり、列石一箇の平均長は約六六センチメートルである。この調査した列石の中には、長さ一メートルをこすものが二六箇で、最大のものは一メートル三〇センチである。列石の奥行は、長さと同じように各列石間に一定したものがなく、極めて不規則である。一般に奥行が大きいものは、その平面形が三角形を呈し、小さいものは、方形をなす傾向が見られるが、これは列石を運搬するに際して労力を軽減するために考慮されたものではないかと考えられる。奥行の大きさには一定の規準がなくて、不規則であるばかりでなく、背面は土塁の構築でかくれてしまうため、前面と違ってその形態も極めて不規則である。即ち、自然面をそのまま残したものもあれば、切り出しのままの加工を施さないものもあって、整然と加工されたものはない。

要するに、列石は前面を整えるために加工が施されているのであって、その列石の陵線をそろえるため高さは一定の規準をもって切り出されている。その長さは、各列石間に一定したものがないことは前に述べたが、箇々の列石で上下の長さが必ずしも一定していないものも相当数用いられている。これは、特に列石線の勾配がひどい部分に見られるもので、勾配の急な地点で隣接する列石と稜線をそろえ接合面を密着させた結果生じ

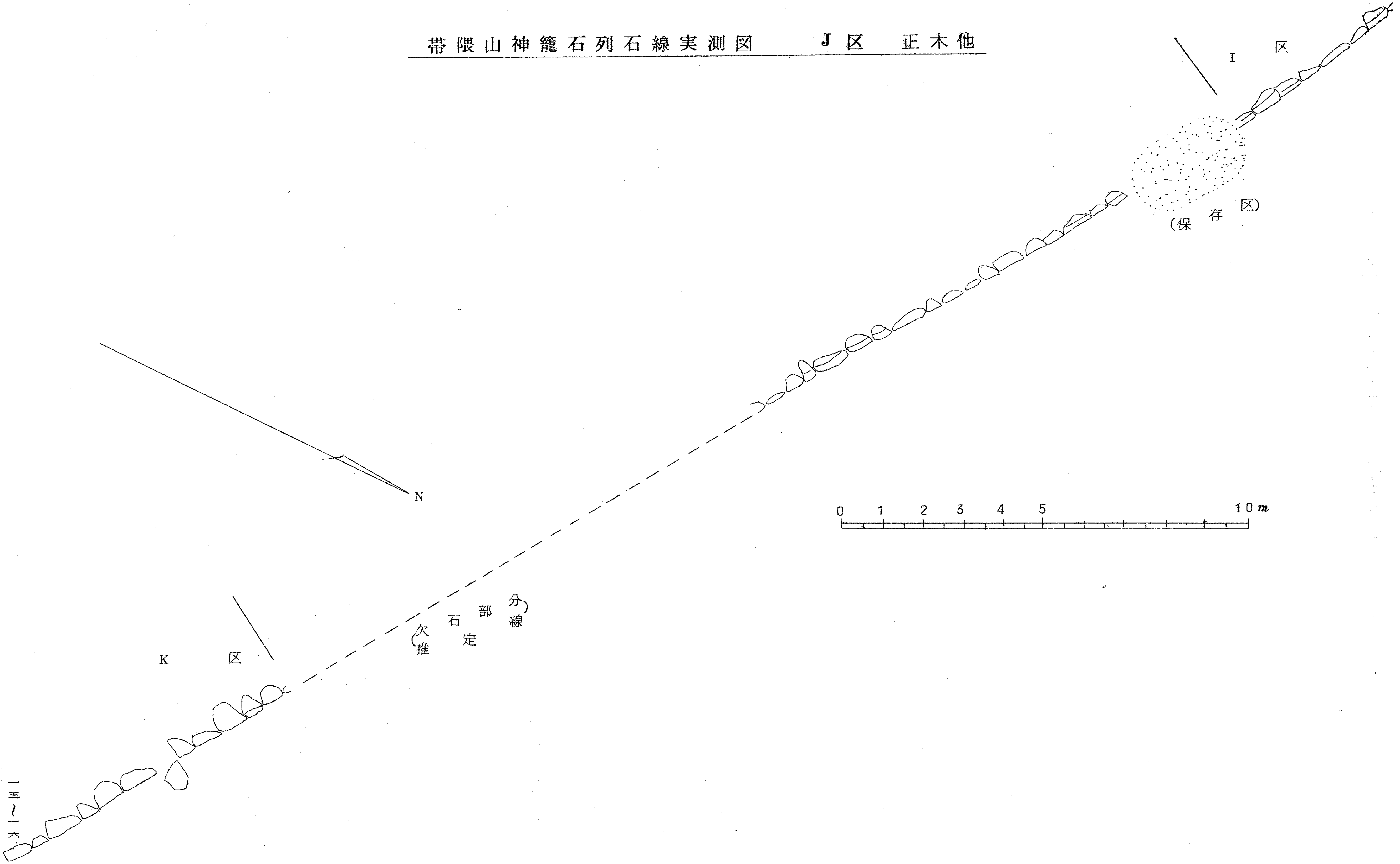
帯隈山神籠石列石線実測図　　B区（陶棺埋蔵地）　木下他



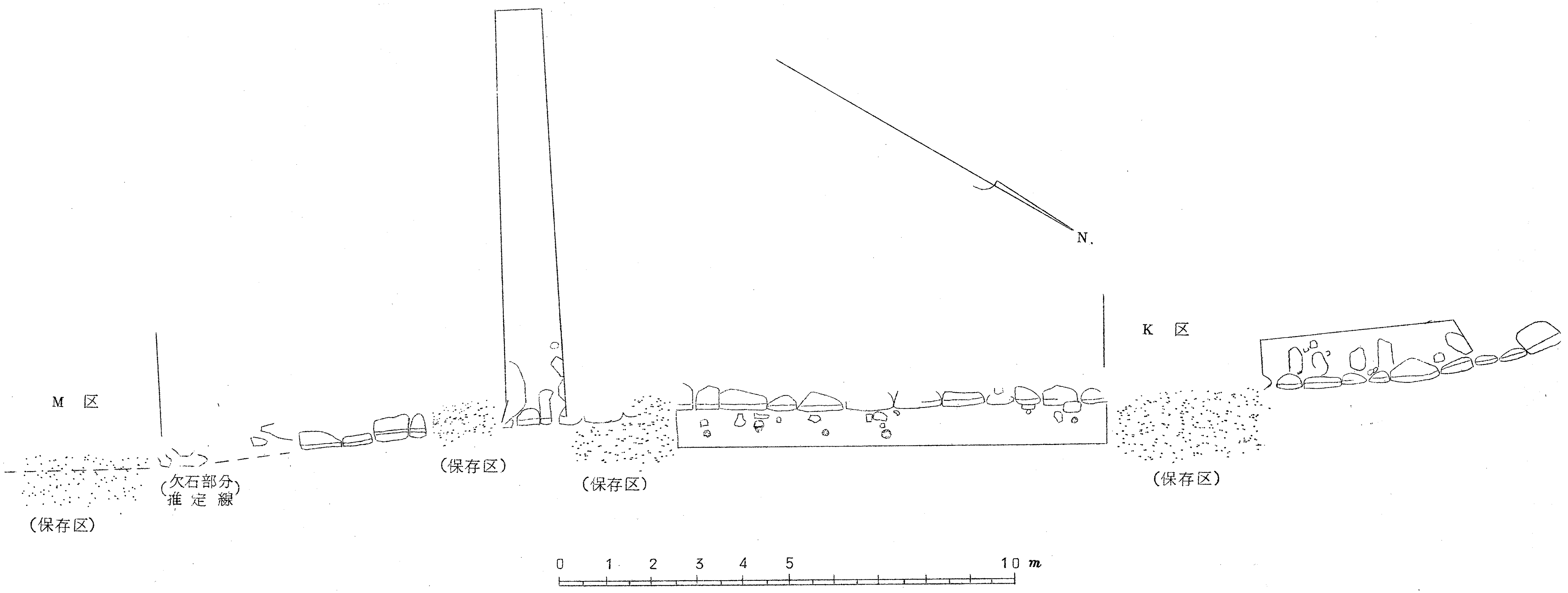
帯隈山神籠石列石線実測図　D区　木下他



帯隈山神籠石列石線実測図　J区　正木他



帯隈山神籠石列石線実測図　　Ｌ区　正木他



た現象であろうと考えられる。

列石には、立上りがついて上面が二段になっているものも相当数用いられている。調査列石三四二箇の中、三分の一強に当る一二六箇に立上りがある。立上りをつけてある列石は、石の大きさには関係なく、また、その配列にも一定の規準は見出されないが、列石を加工する上からの労力や運搬する上からの重量の加重を考慮した時、この立上り部分には重要の意味が含まれてはいないかと考えられる。

列石に加工が施されている上面・前面・両側面とも、その面は平面に近いが、完全な平面ではなく、いずれの面も中央部がやや膨らみを帯びている。そのために、列石線から受ける感じは温かみと柔弱さがある。また、列石は垂直に立てられているところはなく、四度～七度の傾斜をもって、上端を僅かに内側に倒して構築されているため、安定感を覚えさせる。

（三）　列石線の外側

列石線の外側の遺構については、すでに昭和三十九年の調査によって明らかにされているばかりでなく。武雄市のおつぼ山神籠石（昭和四十年三月、佐賀県および武雄市教育委員会発行、おつぼ山神籠石）でも精密な調査によって、その全貌がほぼ明らかとなっている。今度の調査で、この列石線の外側の遺構を明らかにするため調査した箇所は五箇所、その全長は三三メートルに及んでいる。

帯隈山神籠石の列石線中、最高所に位置するこの調査区の列石線の外側にも木柵孔や添石が配置されていることが確認され、その構造はこの神籠石の他の部分やおつぼ山神籠石と相通ずるものがあることが判明した。

Ｂ区の陶棺出土地では、三メートル間隔に木柵孔があって、その中間の一・五メートルのところに添石が設け

られているようで、他の地区と同様な規準になっている。B区の他の所では、木柵孔の間隔が二・四メートル×〇・六メートル×〇・七メートル、D区の木柵孔の間隔は三メートルの規準方式、L区の木柵孔は一・二メートル×一・四メートル×一・六メートル×二・八メートル×一・二メートルと極めて不規則な間隔である。また、北門址の東側では、門柱孔と第一木柵孔との間隔は三メートルであるが、第一と第二の木柵孔との間隔は二メートルにすぎない。

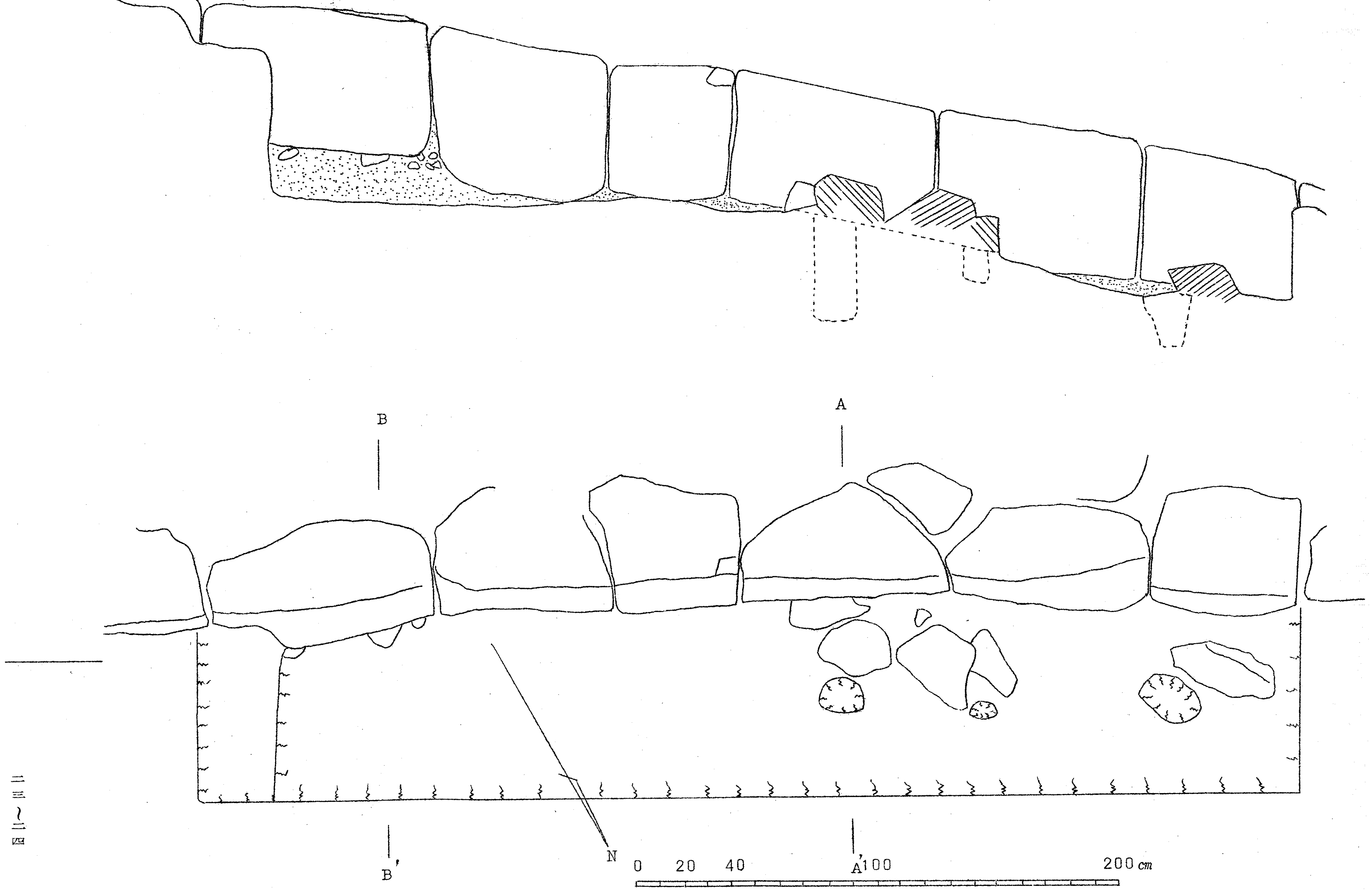
このように、この地区の木柵孔の間隔は、以前調査された三メートル間隔の規準を保っているところは極めて少なく、相当に不規則性が見られるのである。このことは、木柵孔の径や深さにも現われていて、その径は一〇センチメートル～二七センチメートルまででその差が著るしく、深さも浅いのは僅か一三センチメートル余りで、深いのは七〇センチメートルをこしている。

列石が上端を僅か内側に倒し、傾斜させて立てられているのと軌を一にして、木柵もその上部を内側に傾斜させていたことは、木柵孔の傾斜によって明らかである。この木柵孔によって考察すると、木柵は列石の上端に接するか、あるいは僅かばかり離れるかして、列石の外側に立てられていたものと推定される。

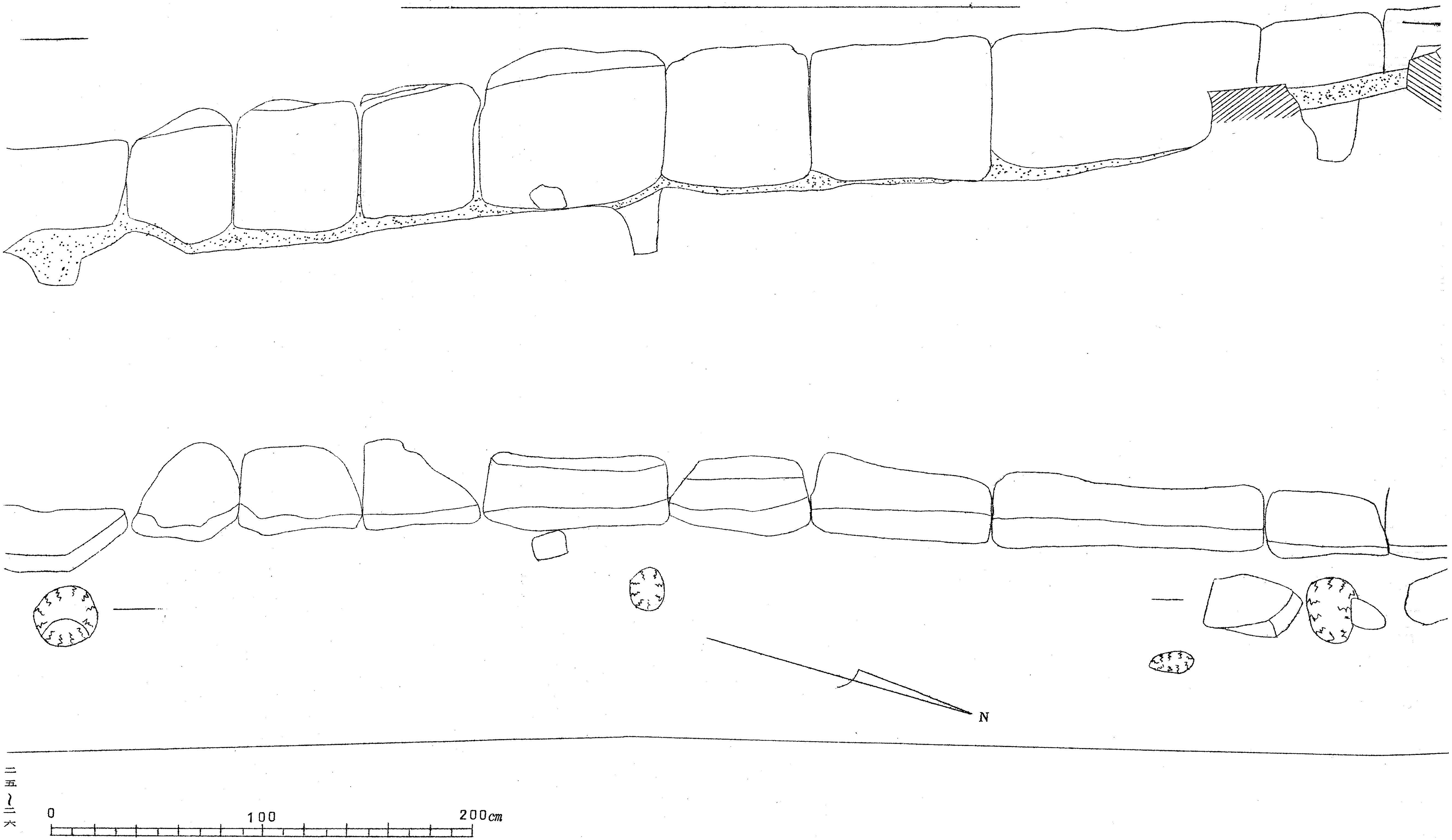
（四）　列石線の内側

列石線の内側の構造を調査するため、K区で四・五メートルの長さのトレンチを設けた。この四・五メートルの間に列石は六箇並べられているが、その中の一箇を除いた五箇の列石の内側には、径四〇センチメートル前後の石をおいて列石を安定させ、さらに列石とその石の間や列石の底部に一五センチメートル前後の小石を多数つめてあった。A区の土塁切断箇所では、列石に接してその内部に列石よりも大きい自然石をおいて列石

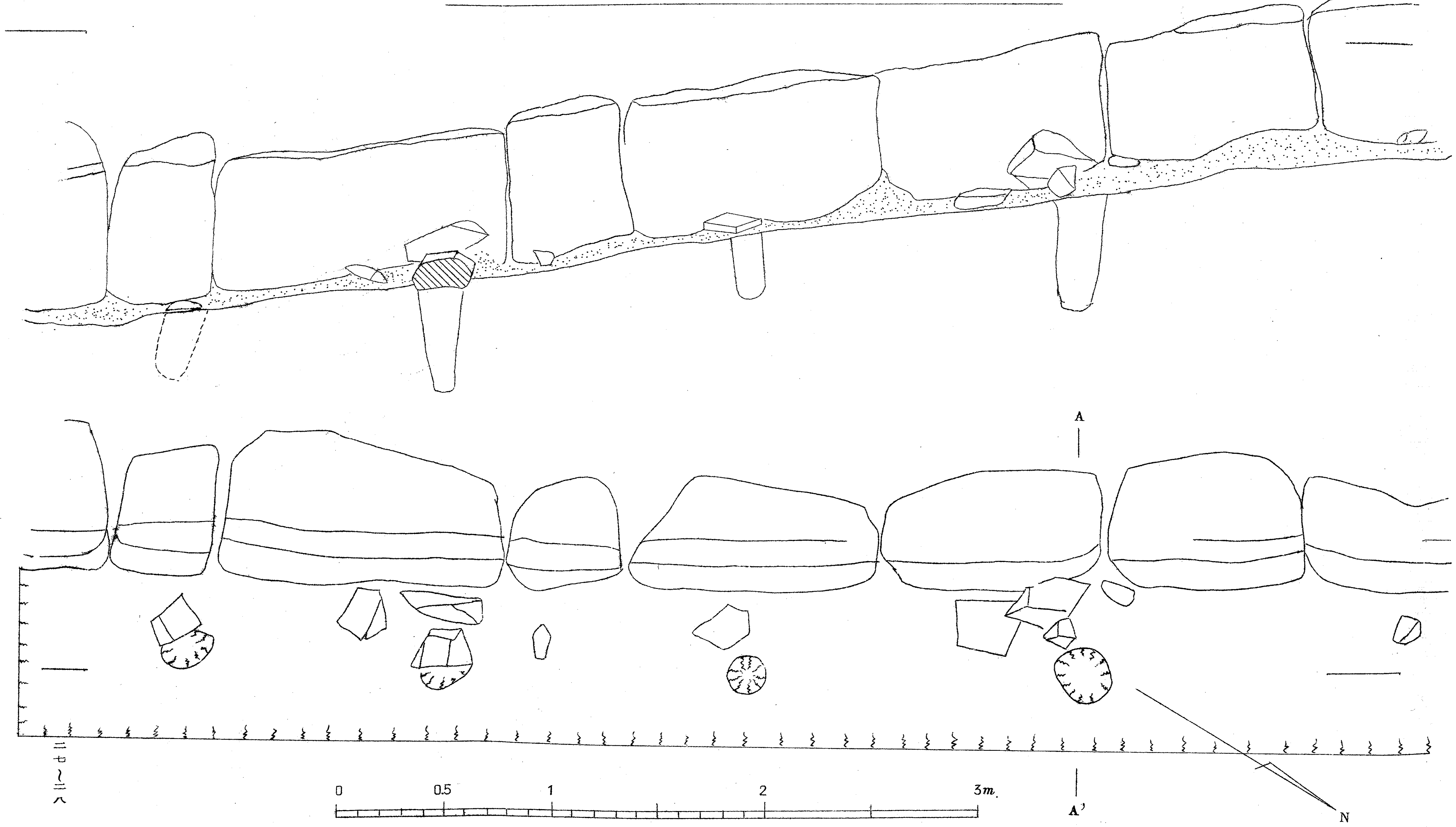
帯隈山神籠石列石線B区実測図　正木・中西



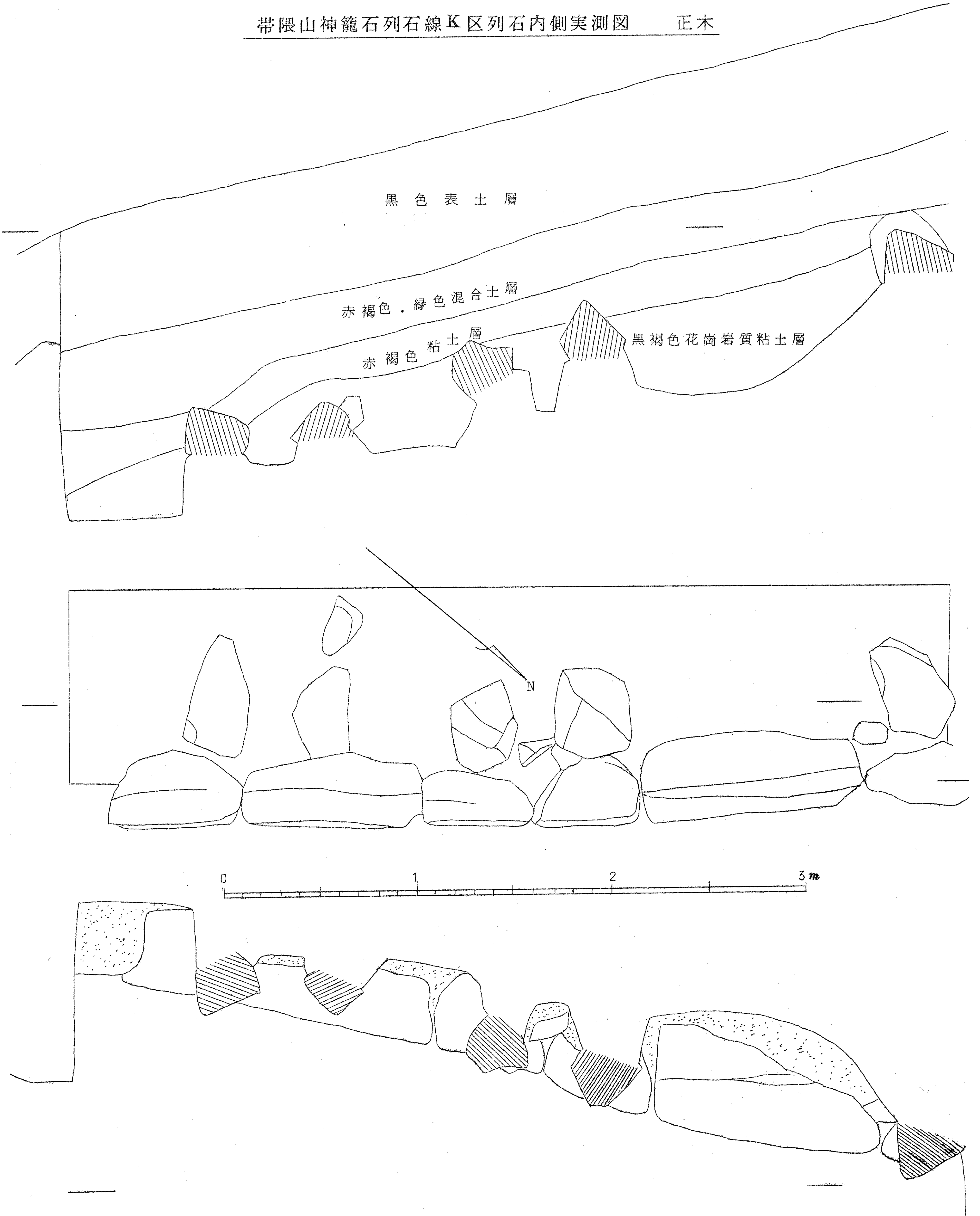
帯隈山神籠石列石線D区実測図　　正木・矢ケ部



帯隈山神籠石列石線L区実測図　　正木・矢ケ部・権藤

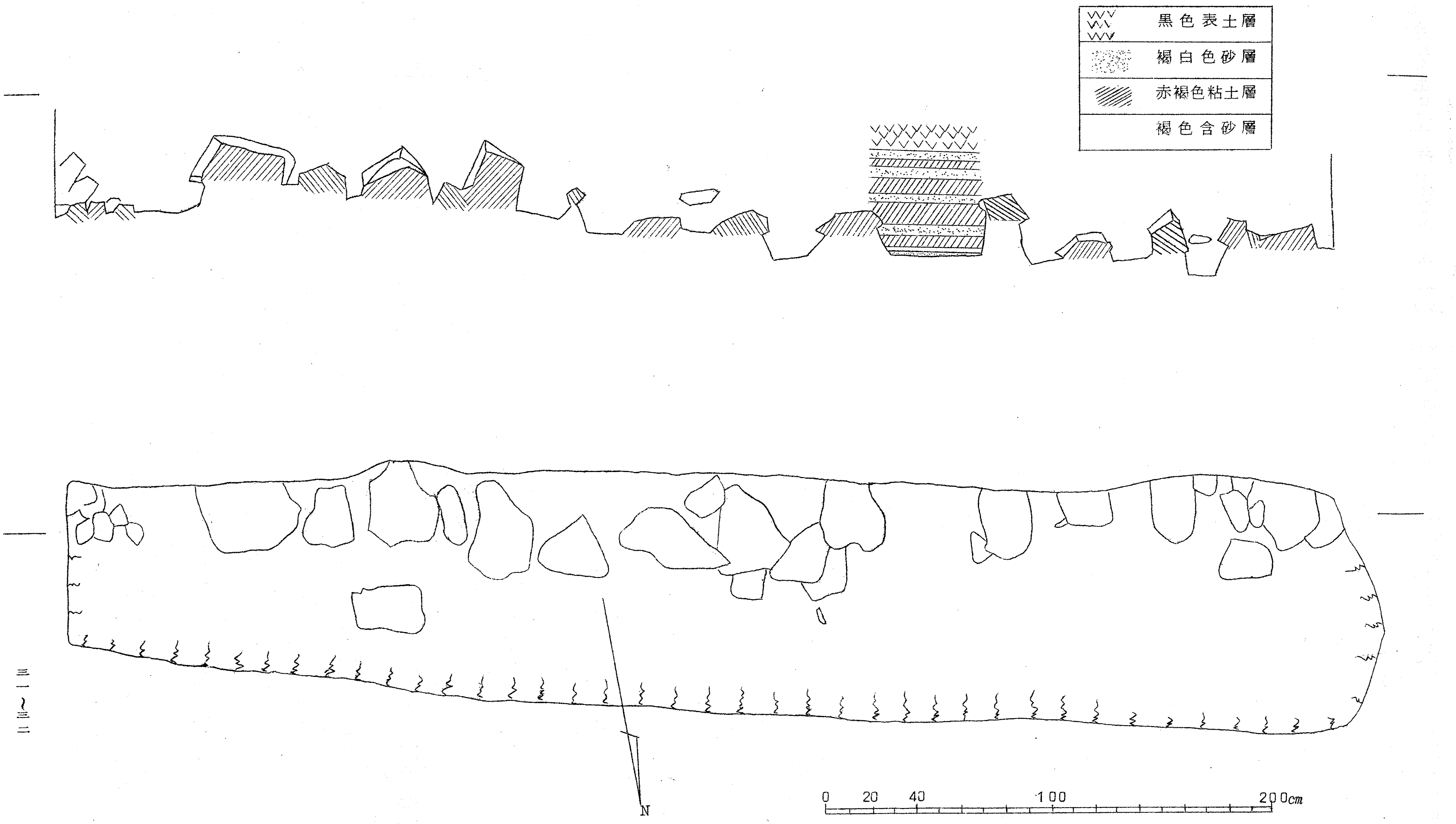


帯隈山神籠石列石線K区列石内側実測図　　正木



11 九〜11 0

帯隈山神籠石列石線C区欠石部分の裏込石実測図　　木下・広政他



を固定させ、さらにその巨石の下にも小石をつめて相当入念に裏込が施行されていることが知られるが、これはＭ区の土塁切断箇所の列石内側でも同様であった。Ｃ区の欠石部分には、列石の裏込石だけが残っていたが、残存しているのは裏込石の一部分と考えられ、径二〇センチメートル前後の石が全面的に配されていた。

内側に僅か傾斜をもたせて立てられている列石を安定させるため、その内側には大小多くの裏込石を用いて、相当に入念な工事が施されている。そのため、列石線の大部分は今日尚安定して原状を保っているものと考えられる。

（五）土塁

列石線の内側には、列石線にそうて土塁が設けられていることや、その構造については、すでに昭和三十九年の帯隈山神籠石の調査やおつぼ山神籠石の調査で明らかにされている。今度の調査では、Ａ区とＭ区の二箇所で列石線とほぼ直角の方向に土塁を切断して調査した。Ａ区の土塁は、列石線からの奥行九・五メートル余りで、以前の調査で明らかにされた九メートルという土塁の計測値とほぼ同一である。高さは、列石線の上端から最高部のところで一・三メートル余りであるが、築成当初の規模は明らかでない。

列石に接する部分は、赤褐色粘土層と白色砂層または暗灰色砂質土層とが交互に帯状をなして構築されているところから見て、版築工法によって築かれていることが明らかである。しかし、この版築工法が施されているのは、列石線の外側から三・八メートルのところまでであって、中央部四・三メートルの間は赤褐色粘土層の単純土層で、その中央付近に幅二四センチメートル余りの白色花崗岩質砂層が帯状に嵌入して赤褐色粘土層を両断している。一番内側の一・四メートルの部分は、白色砂礫層の単純土層となっている。この土塁の表層は、

厚さ二〇センチ〜三二センチの黒色腐蝕土層となっていて、この土層が全面を覆うている。

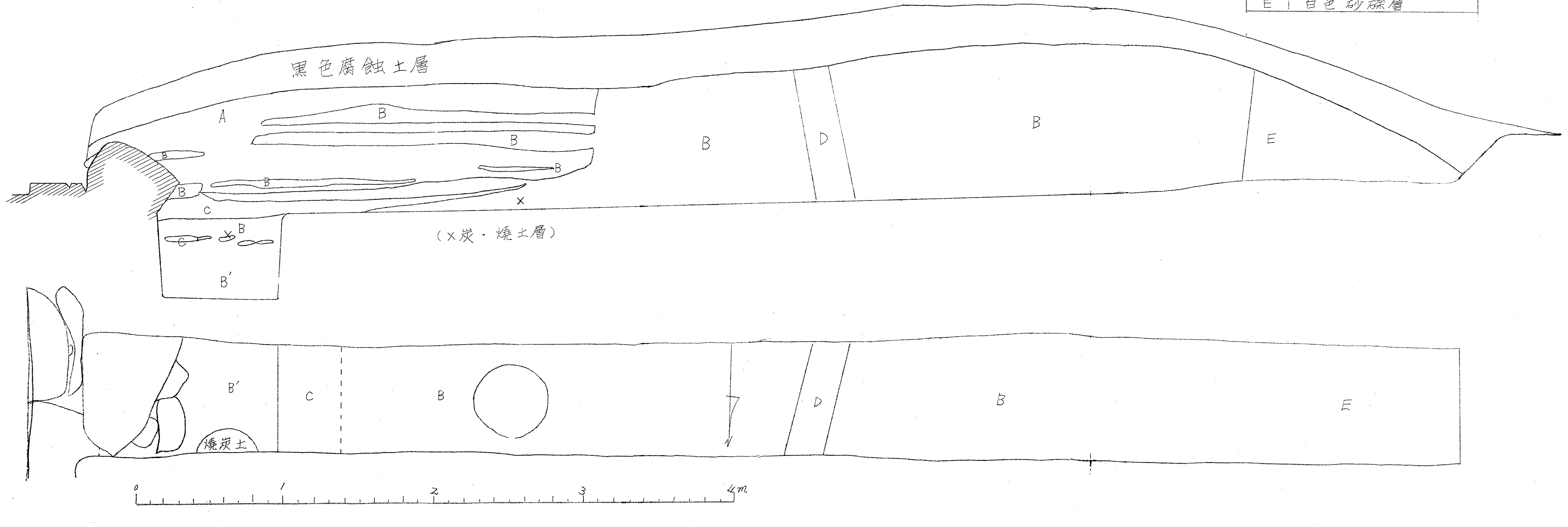
この土層が人工的に築成されたものであることは、表層から一・一メートルおよび一・二メートルの下層二カ所から木炭と焼土が塊となって発見されたことによっても明らかである。しかし、人工的に構築された土塁の部分と基盤層との境はどこであるのか明らかにすることができなかった。

M区の土塁は、A区とは対象的に自然の地形を利用したものである。このL区の列石線は尾根にそうて、その直下に設けられているため、この尾根が土塁の役目を果している。そのために土塁の奥行は、通例の九メートルを相当に越えており、高さも四メートル余りあって著るしく高い。自然の地形を利用した土塁であるので、人工的に構築されている部分は、列石に接するごく僅かの部分であろうと推定されるのであるが、版築の痕跡もなく人工的部分を明らかにすることが困難である。これは、この部分が尾根下にあるため、列石の外側は急な険崖となっていて、列石はかろうじて残存しているが、土塁の土砂は相当に流出していることが考えられ、列石の内側は極めて緩やかな勾配をなして流出の痕跡をとどめており、土塁を破壊し去っていることが推察される。列石線の外側から二・八メートルのところの黒色表土層の厚さは、六〇センチメートルもあって著るしく厚い層をなし、落ち込みの形跡が見られるが、この地点が人工的構築部分と自然的部分との境ではないかと一応推定されるのであるが、この土塁においても人工的に構築された最下層は、明らかにすることができなかった。

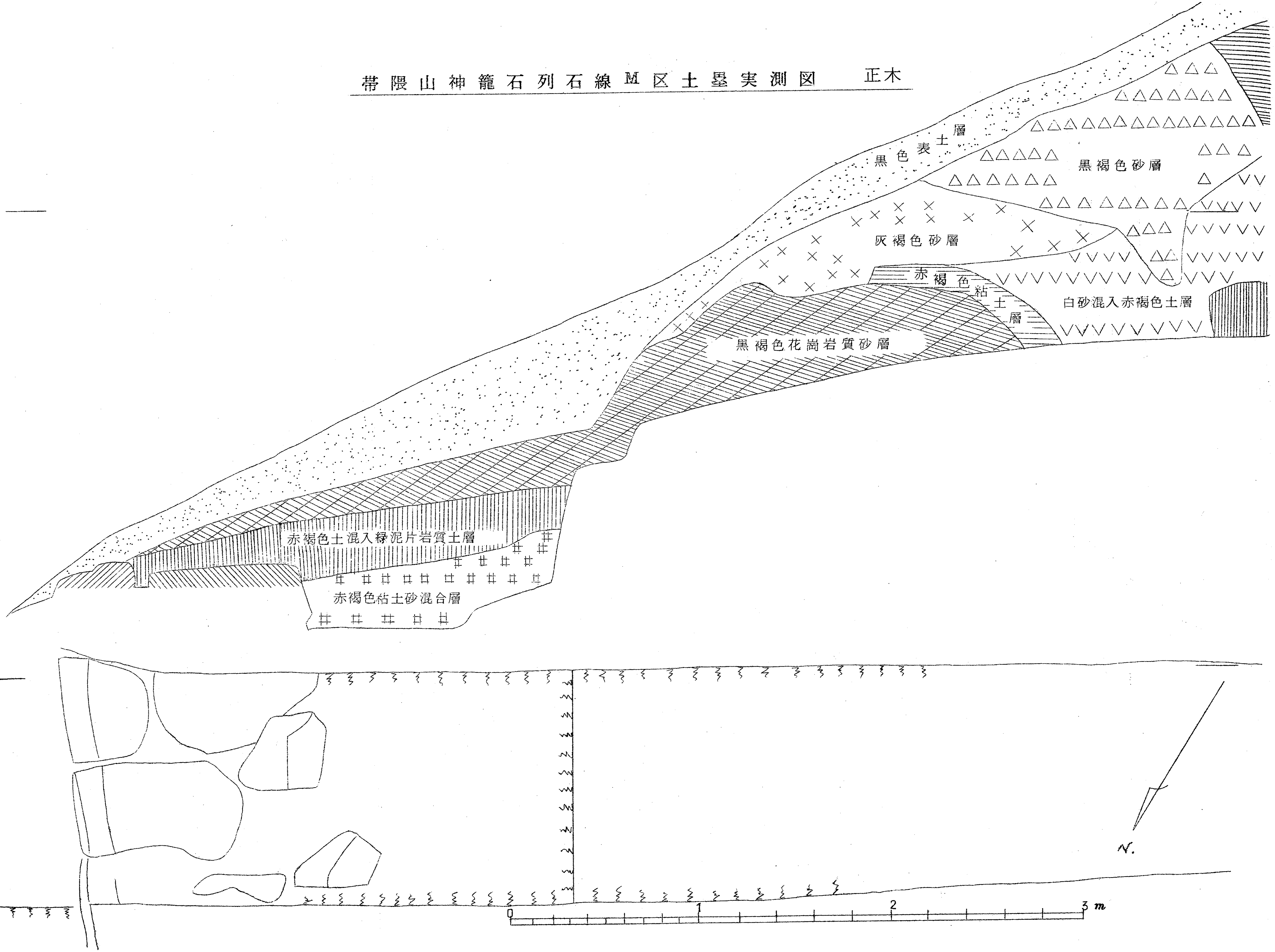
列石線の内側に設けられている土塁の構造は、画一的なものでなく、地形によって異なっていて、自然の地形を利用してその一部に加工が施されているものがあり、また、全体が人工的に構築されているところもある。全体が人工的に構築されている土塁の奥行は、九ーメートルの規準を用いているものと考えられる。

帯隈山神籠石　A区土塁実測図　正木．中西

A	白色砂層
B	赤褐色粘土層
B′	純赤褐色粘土層
C	暗灰色砂質土層
D	白色花崗質砂層
E	白色砂礫層



帯隈山神籠石列石線M区土塁実測図　正木



土塁の列石に接している部分が人工的に構築されているのは、地形の如何をとわず共通している点であって、C区の裏込石の内側やK区の裏込石の内側にも版築された土層が明瞭に認められた。ただC区では、僅か四センチ〜一〇センチの極めて薄い版築の層が幾層にも重なっているのは、他に見られない特色であろう。

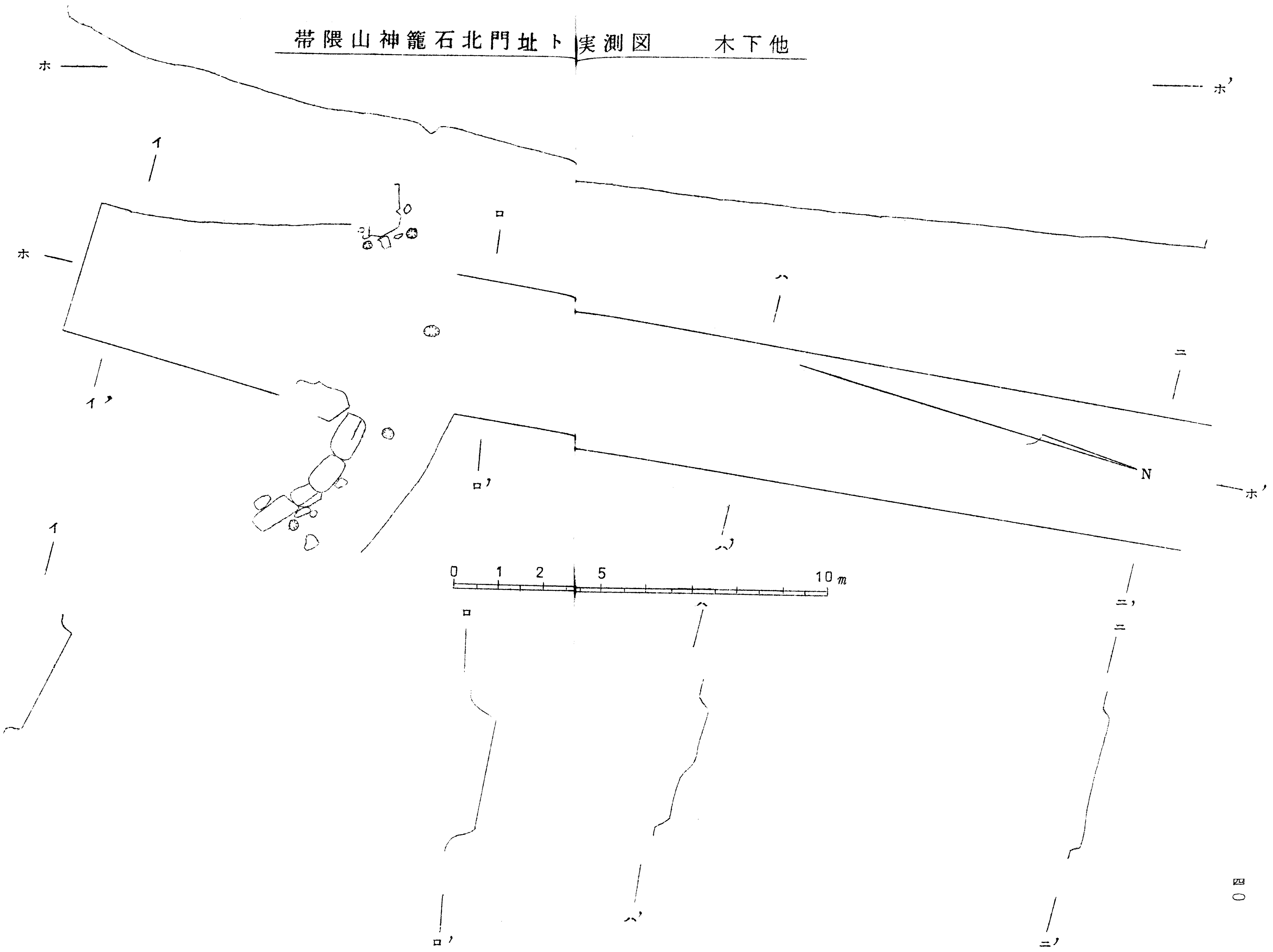
(六) 北門址

この門址は、この帯隈山神籠石で明らかにされている門址としては唯一のもので、列石線の最北端に位置している。昭和三十九年の調査に際して、この門址も一応調査されているが、その時は門址の内側のみが対象となっていたので、今度の調査では内側の調査範囲を拡張するとともに、門址の外側の平坦部にトレンチを設定して調査を行なった。

門址の間口は四・〇メートルで、左右の列石の外側にある孔が門柱孔であろうと推定され、この門柱孔の間隔は四・五メートルである。この門柱孔は径二〇センチメートル余りで、深さは五〇センチメートル以上と推定され、両孔ともに相似た大きさであり、ともにまた根じめの小石が孔中におかれている。西側の門柱孔の一メートル内側には、径一〇センチ・深さ二〇センチメートル余りの一小孔があるが、東側にはこれに相対応するものがなく、他には内側から何らの遺構も発見することができず、地形にそうて門口から緩やかに高くなっている。

両門柱孔の中央やや西寄りに柱孔らしいものが一孔存在している。東門柱孔から二・五メートル、西門柱孔から二メートルのところにあって、西へやや片寄っているのみでなく、両門柱孔を結ぶ線より約八〇センチメートル外側に位置している。径は三〇センチ×四〇センチの隋円形で、深さは僅かに三〇センチメートル弱で

帯隈山神籠石北門址ト実測図　木下他



浅い。これが門の中央柱であるとすれば、門扉は左右大きさが異なり、しかも、中央部が外側へ張り出すことになる。

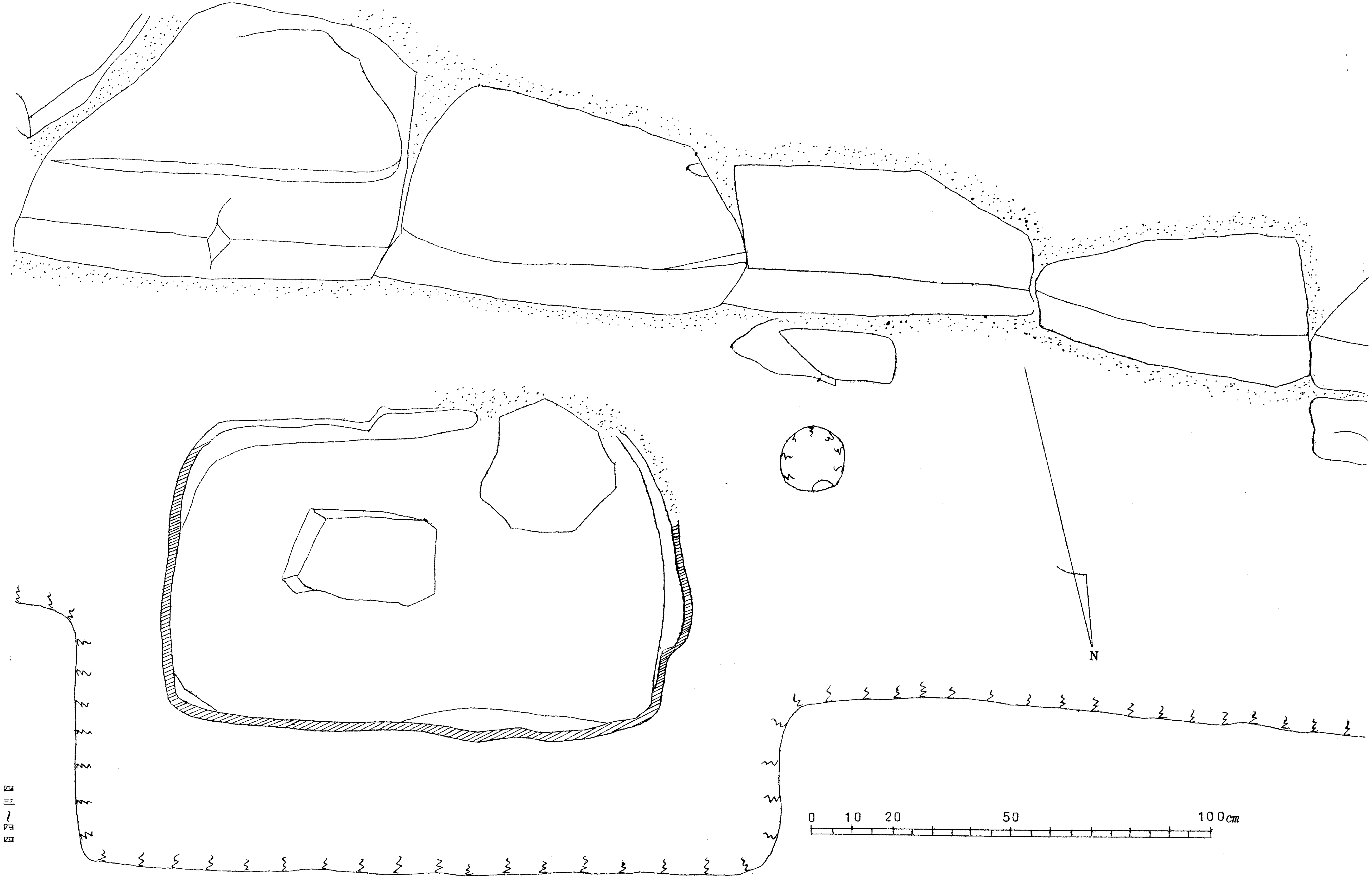
門址の外側は、僅かに傾斜する平坦な前庭となっているので、門柱孔のところから長さ二〇メートル、幅二・八メートル〜三メートルのトレンチを設けて調査したが、内側と同様に何らの遺構も発見することができなかった。僅かに土師器の破片が数箇発見されたが、神籠石の築成と直接的に関連を有するものであるかどうか明らかでない。

(七) 内部遺構

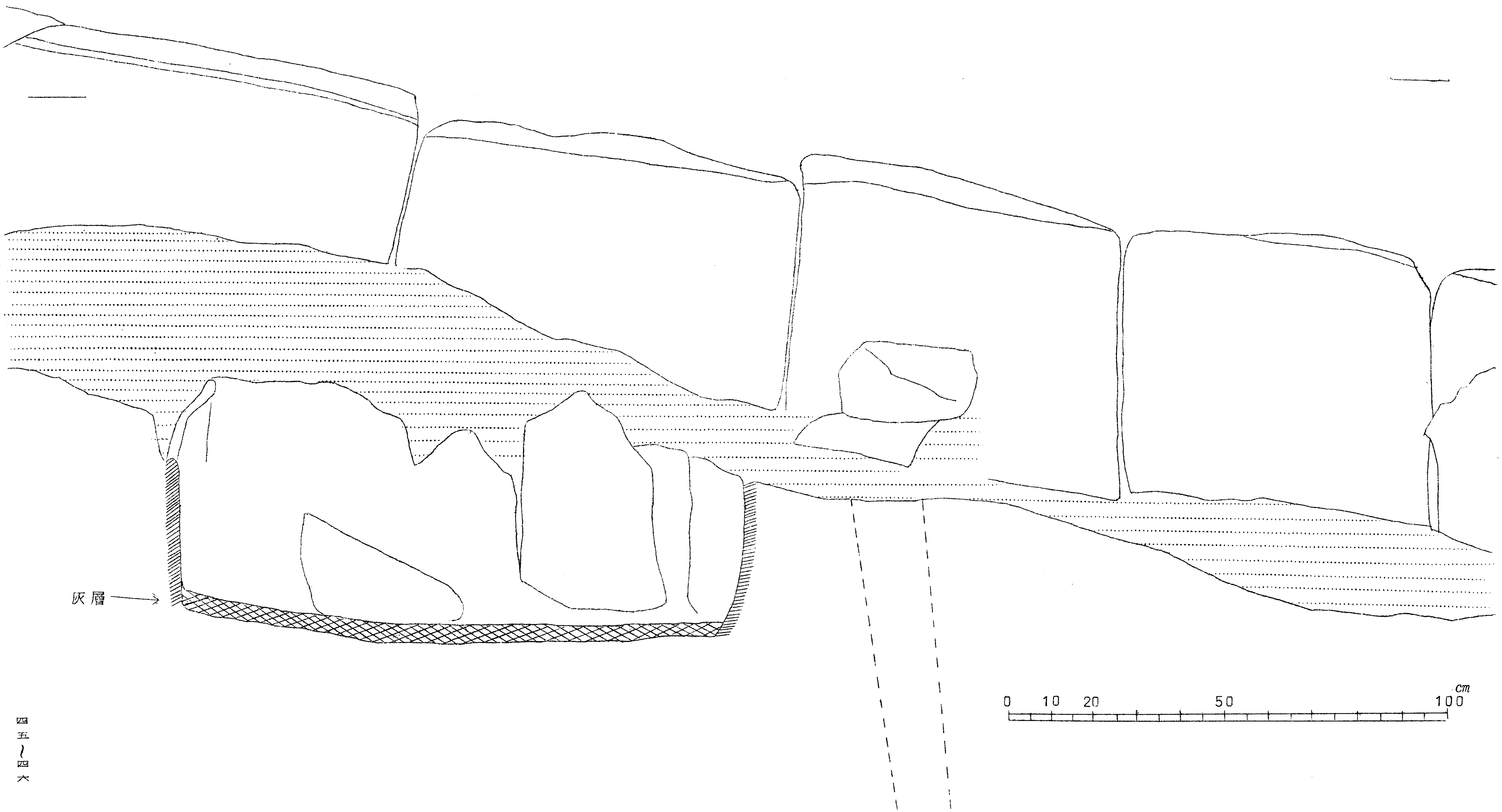
内部遺構の調査は、帯隈山頂上とGH区南方の地形が比較的に平坦な二か所を選定して実施した。帯隈山頂上には、南北の方向に三メートル間隔で長さ一〇メートル・幅一・五メートルのもの二本とその中央を結ぶ一本のトレンチをH形に設定して、調査した。厚さ二〇センチ〜三〇センチメートルの黒色表土層を除去すると、その下は黒褐色土層となる。このトレンチ内から径六〇センチ、深さ一五センチ余りの円形凹みと、これから二メートル離れた地点から小孔が発見されたが、他には遺構がなく、また、遺物も発見されなかった。

GH区南方では、長さ一六・五メートルと五・五メートルのトレンチをL形に設定して調査した。トレンチの東端付近から土師器片三箇が出土したので、この地点のトレンチを拡張して調査に当ったが、遺構を発見することはできなかった。

帯隈山神籠石列石線B区陶棺出土地平面図　木下・柴元



帯隈山神籠石列石線B区　陶棺出土地断面図　　木下・柴元



（八）　陶　　棺

列石線Ｂ区から発見されたもので、列石線から二五センチ〜三五センチメートル外側に埋置されている。長さ一・三メートル、幅八〇センチメートル余りの隅丸方形で、高さは現存部の最高四〇センチメートルである。底部には厚さ四センチメートルに木灰が敷きつめられており、壁面の厚さは一定していないが、大体三センチメートル前後である。側壁の破損度も大きく、蓋は破壊されたらしく存在していない。土師質の極めて脆弱な焼成であるため、取り上げるのが困難であり、埋戻して保存することにした。

一般に陶棺と称されているものとは、異なった点もあるが、その形態や埋置状態から考えて、陶棺とするより他にこの土器の用途は推定し難い。九州地方では皆無にひとしい陶棺ではあるが、この帯隈山神籠石のある佐賀市久保泉町川久保からは、かって須恵器の陶棺片が発見されていて（佐賀県文化財調査報告書第十三集「佐賀県の遺跡」）、この地方に陶棺の所在する可能性が大きい点もまた考慮すべきであろうと考えられる。

この陶棺で注目される点は、神籠石の列石に接している方の壁面の破損がひどく、列石の添石の置かれている部分は、ほぼ完全に破壊されていることである。この陶棺は、神籠石の築成によってその大半が破壊されているということは、神籠石の築成がこの陶棺埋置よりも後に行われている事実であって、神籠石の築成年代を考究する上から注目されるのであるが、陶棺中からは何らの遺物も発見されず、陶棺の年代を推定する手がかりも今のところ見出しえない。

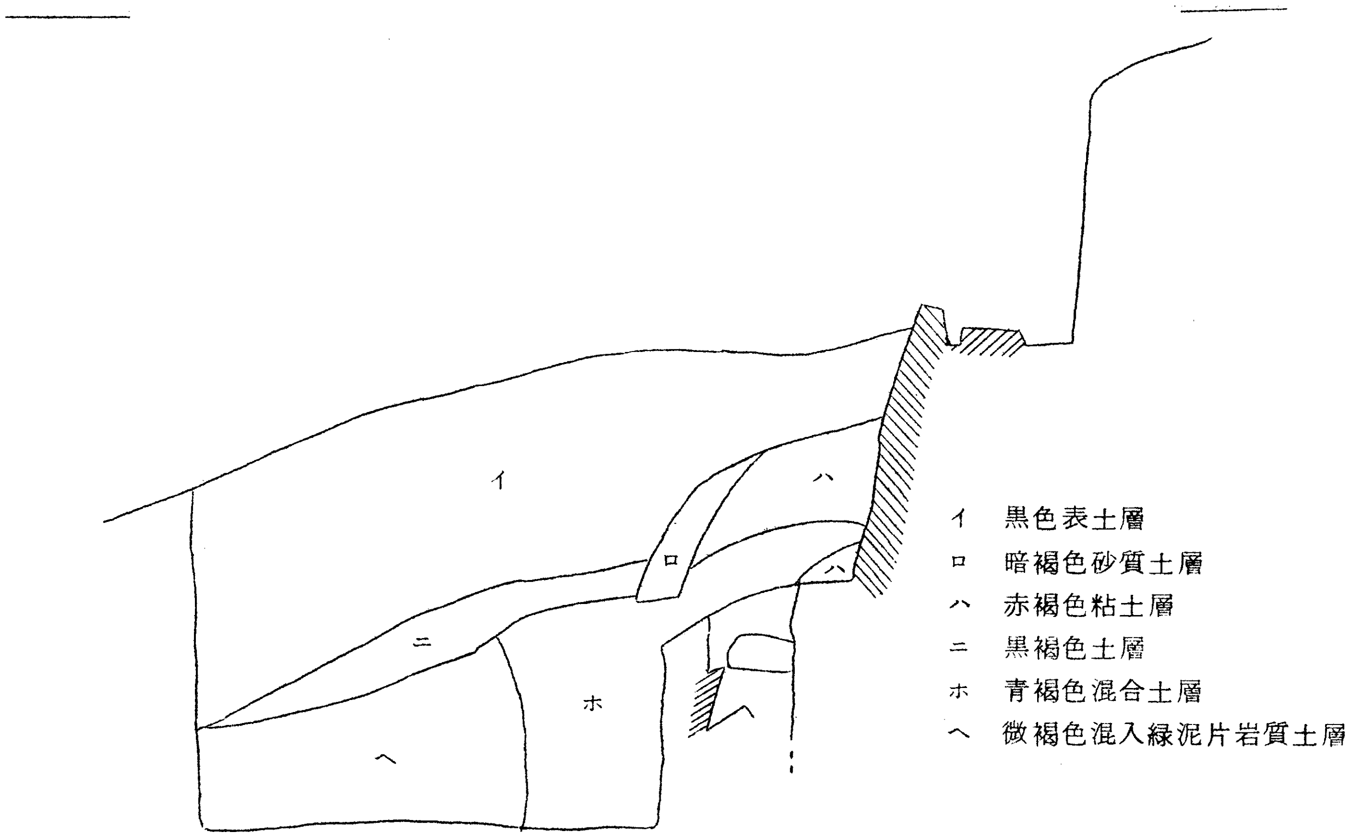
四、総括と考察

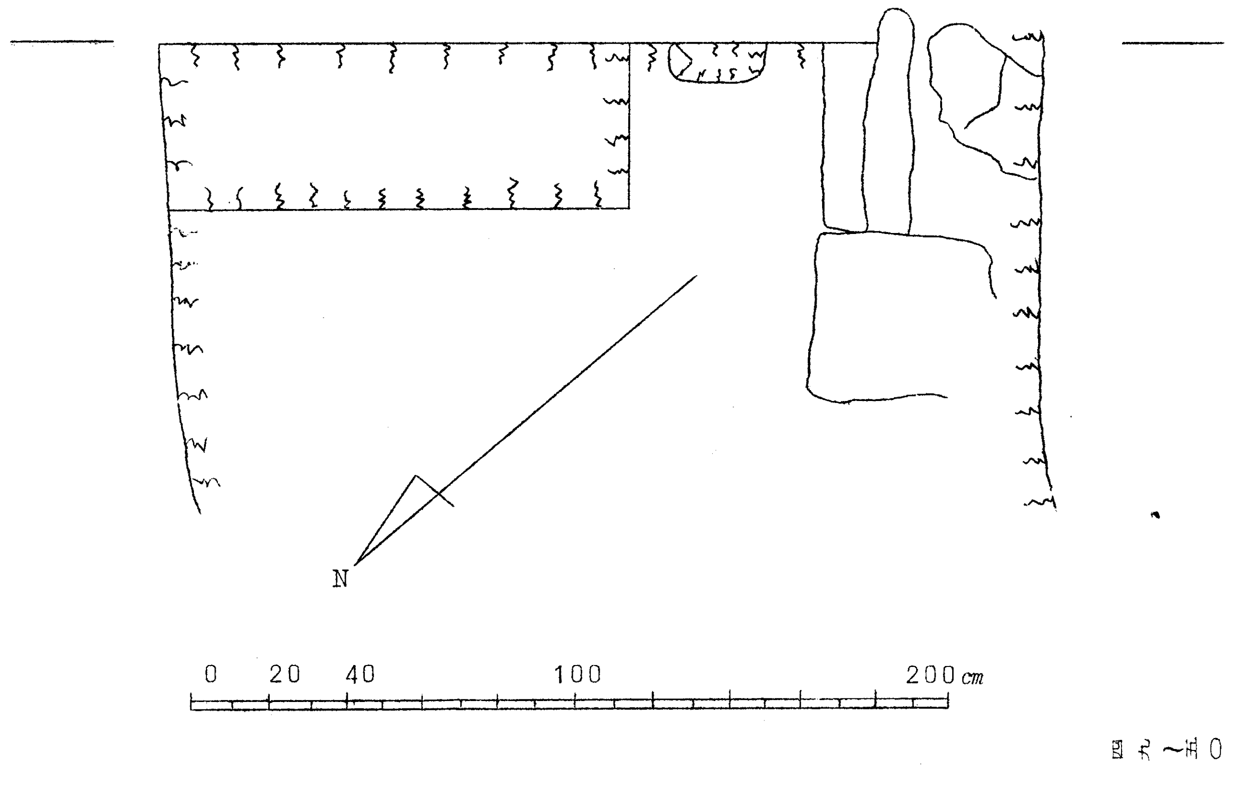
帯隈山神籠石は、昭和三十九年に調査が行われ、その主な遺構についてはすでに明らかにされている。今度の調査は、ごく限られた一部の地区を、ごく限られた日程をもって実施したもので、その成果に大きな期待をよせることには無理があるように思われた。しかし、この神籠石では最高処に位置する未調査地区であって、調査の万全を期して調査員は努力した。その調査の結果を整理し、若干の考察を加えてみることにしたい。

(一) 列石と木柵

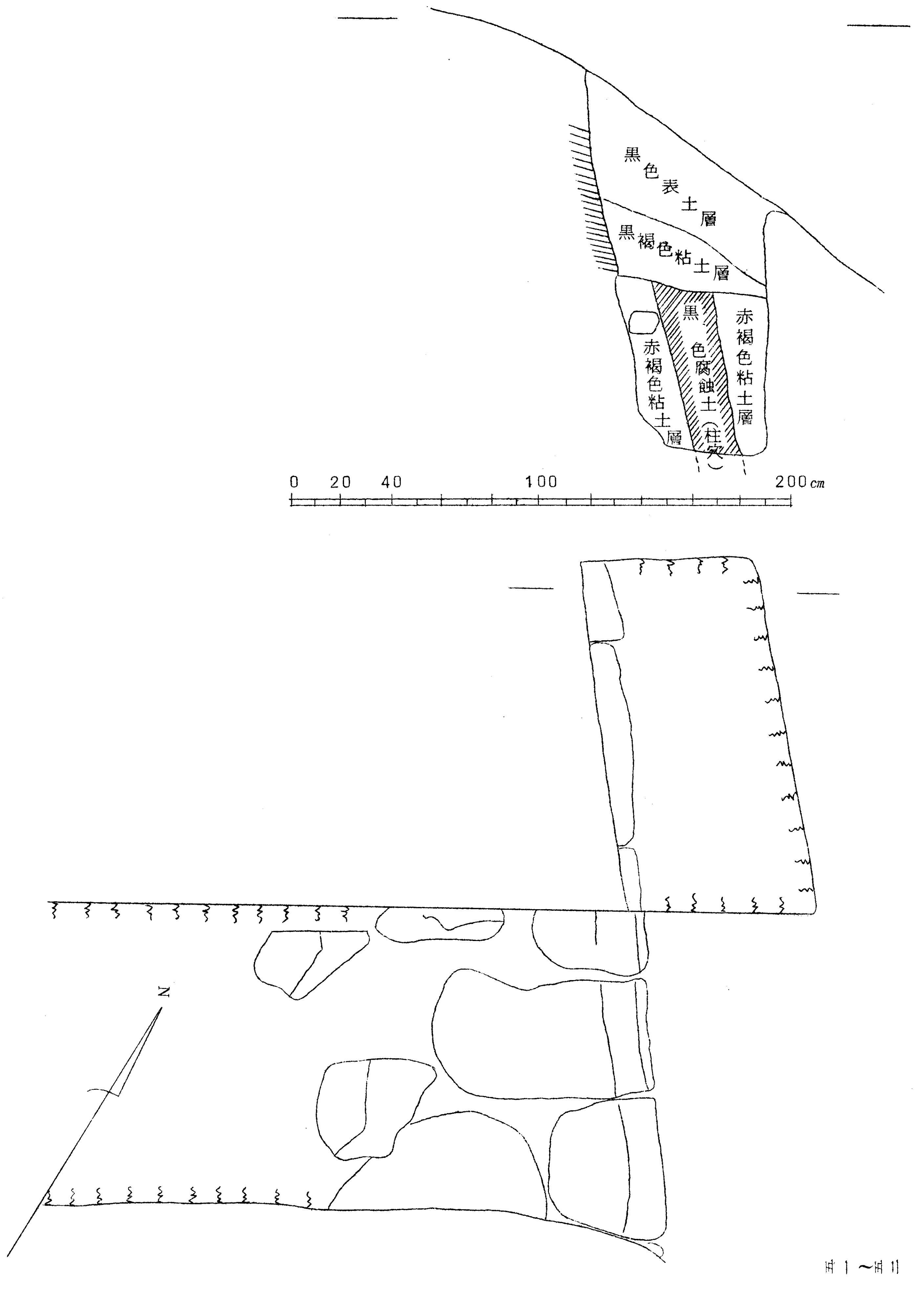
神籠石の重要な遺構である列石について、「これまで列石すなわち神籠石と考えられていた。今回の調査で列石は土塁前面の基底部にあり、神籠石は柵と土塁で構成されるもので、列石をふくむ周辺の構築は外郭線であり、……」と、佐賀県および武雄市教育委員会発行の「おつぼ山神籠石」には述べられており、また、「この控石のようなものをこれまで添え石と呼んできたが、調査ヶ所では、縦長の石を用いた場合は、列石と柱の間にかませるような状態になる。このような添石もまた柱の傾と同じ傾斜に置かれたことを示している。若しこの石が柱根を固定させる役目をなしていたとすれば、少くとも添え石の大部分は土中に埋没させた方がより効果がある。とすれば、僅か六〇糎余りの高さしかない列石正面の大半は土中にかくれていたことになる。このような状態を想像すれば、列石の外観はその上縁を僅かにのぞかせて柵柱の止め石の役目を果していたことになる。しかしながら切石の加工の面から見ると、正面の石は面を平らかにととのえ、上縁にも面取りが見ら

帯隈山神籠石北門址前トレンチ東端実測図　　木下・宮崎・北原・広政





帯隈山神籠石列石線M区柱穴実測図　正木



れる。このような一見矛盾した効用と工作の両面を如何に解釈するかが今後の問題として残される。」と、佐賀県および佐賀市教育委員会発行の「帯隈山神籠石とその周辺」には述べられている。

文化財保護委員会編集の「石城山神籠石第一次調査概要」には、「北水門東側尾根の母胎であった岩盤を└┘字形に切り開いて列石をおいたところで、列石の前後の両面を築土の層序で覆いかためられていたことを明らかに認めることができたが、……列石は少くとも六〇糎以上前面に覆土をもって、かくされていたことを確認させた。……したがって列石は少くとも前面に六〇センチ以上築土で覆いかくされていたことになり、この列石は築堤の基礎がための役を果したもので外部に表われていたものでないことを明らかにした。」と記されている。

今度の調査区の列石は、すべて埋没していた。A区の北門址の東側・B区・M区の三か所で、木柵孔のところの断面を切って、木柵と列石の関係および列石前の覆土について調査した。A区では、木柵孔の上端は列石の基底部とほぼ同一のレベルにあって、それより上の土層には木柵の痕跡が認められない。B区においては、木柵の上端が灰褐色土層となって、列石の外側へのびる赤褐色花崗質土層中に、列石の基底部より一〇センチの高さまで及んでいる。しかし、それより上層にはのびていない。M区では、木柵孔が黒色腐蝕土となって赤褐色粘土層中を貫いているが、その上端は列石の基底部と同一のレベルであって、それより上層には及んでいない。

この木柵孔が列石の基底部より上層に及んでいないということは、列石の基底部より上層は後世における落込み土層と推定され、この部分の土層には版築の痕跡も認められなかった。これによって、築成当初においては、列石はその外側面を全部露出していたのではないかと推定されるのであるが、外側面を整然と加工し稜線

をそろえて並べてあるその構造からみても、また、列石の内側に大小の裏込石を用いて列石を強固に安定させている工法から考えても穏当なことではないかと思われる。列石の上面に立上りがついて二段調整になっている列石が相当数用いられているが、この立上りは列石の大きさや配列などには全く関係がないようであって、この立上りの部分が何を意味するのであるか明らかでない。しかし、列石の外側の面を全部露出させていたものとすれば、この立上りの部分が土塁線の先端ではなかったろうかと考えられる。

(二) 列石の運搬と配列

斜面を鍵手状に切り崩して、列石が並べられていることはいうまでもない。列石を配列する順序を考えてみると、先づ最初に神籠石全体の縄張り(設計)が行われ、列石をめぐらす地点が明らかとなる。この列石をめぐらす地点の斜面を鍵手状に切崩していくと、山腹をめぐって臨時の山道が構成される。この山道が列石を運搬する道路として利用され、一定の地点から列石を順次配列していったことが推定される。

列石線の内側には、相当数の裏込石がおかれていて、列石を安定させその崩壊を防ぐ措置が講ぜられている。この裏込石はすべて加工されない自然石であって、列石に接する部分に比較的大きな石を用い、列石から離れるにつれて小さくなる傾向が見られる。列石から裏込石までの奥行は、M区において一・六メートル余り、K区において一・二メートル余りで、相当な広さを有している。

斜面を切崩して造られた平面のどの地点に列石が並べられたか明らかではないが、列石の安定性を考慮した場合に、ある程度先端より内部に入った地点が選ばれたことが推定される。また、列石の外側に木柵を設ける時、切り落された土砂中に立てることは不可能であろうと思われるので、木柵もやはりこの平面に立てられた

ものと考えられる。列石の裏込石の奥行が一・五メートル前後あることを考えると、この切崩して作られた平地は、少なくとも二メートル以上の幅員を有していたことが推定される。二メートル以上の幅員を有する道路であったため、六〇×一三〇×五〇センチというＩ区にある大きな列石も運ぶことが可能であったと考えられる。

（三）　採石地と北門址

この帯隈山の地層は、比較的に複雑であって、緑泥片岩質の土層が多いようであるが、一部には花崗岩質の土層も見られる。列石にはすべて花崗岩が用いられているが、この帯隈山の南斜面の一部には今も花崗岩の露頭が見られるので、この帯隈山の花崗岩も列石に用いられていることは疑う余地がない。

佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第十輯の「帯隈山神籠石」には、「此処の列石は全部他から花崗岩を持って来たかというと、そう断定する訳にはいかぬ。帯隈山やその西南の支峰には深成岩の花崗岩があらわれている所もあるからである。併しそれも加工困難な鬼みかげ石の様であるから大部分は加工出来る良質の石を産する付近の河川から運んだのではあるまいか。付近には二粁以内に花崗岩が川底等に良質のものが沢山あるのでそこから搬出したものであろう。」と述べられており、また、別のところに、「天童、鳥越、清兵工山、桃山の列石は殆んど全部他より運搬して来たもので、西谷水門の南発掘地の大巨石（三尺－六尺）の如きもそうである。帯隈山の列石の一部には、母岩を使用したかと思われるものがある。鬼花崗等はやはり元からあった岩を近くの列石にあてたらしい。」と、記されている。

帯隈山との間に谷を距ててその北側に位置する山丘が、最近山火事にあって山肌を露出させ、山復から山頂

へかけて花崗岩の露頭がみられる。この花崗岩中には、神籠石の列石と同じ加工の施されているものがあって、列石の一部がこの山丘から切り出されていることがほぼ明らかとなった。この山丘から切り出された石は、谷におろされ、そこから北門址の方へ続く二つの尾根伝いに引揚げたのではないかと考えられる。

北門址の外側には、平坦な前庭がひろがっているが、調査の結果はここから何の遺構も発見されていない。しかし、北方に位置する採石地の山丘へ最も接近したところにあるこの北門址とその前庭は、列石の運搬と密接な関係があったのではないかということが考えられる。その位置や地形などから考えて、前庭は搬入された列石の集積場で、北門址から列石は左右に運ばれていったのではないかということが推定されるので、一応の推定をなし後考をまつことにしたい。

「帯隈山神籠石とその周辺」には、北門址について、「ゆるやかに登る地盤には柱痕も列石もなかった。これでみるとまことに簡単な門で、若し扉でもあるとすると、門址入口の両側の柵柱にとりつけるより他はない。元来北門址は山頂に近く、防禦の態勢としては裏手になって、且つ高所にあるので、特別な防策とならなかったかも知れない。」と述べられている。この北門址は、列石運搬の拠点として重要な使命を有していたもので、築成後は余り重要性はなく、その使命を終っていたのではないかということが考えられる。

列石が採石地で加工され運搬されたものか、半加工されて運搬され現地で再加工されたものであるのか明らかでない。しかし、帯隈山北側の採石推定地には、ほぼ完全加工に近いものが存在している点から考えて、採石地において加工されたものではないかということが推定される。佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第十輯の「帯隈山神籠石」にも、「加工して運んだのか、現地で加工したかについては明らかでないが、石切場等が判然せぬので恐らく加工して軽くして運んだものではなかろうか。列石現場に加工の際の石片が見当らないのか

ら考えてもそう思える。」と述べられている。

列石線の外側の精密調査を実施した五か所からは、列石を加工した石片は一片も発見することができなかった。また、列石線の裏込石を調査したC区でも、裏込石の中に加工片を見出すことはできなかったし、列石線内側の精密調査を実施したK区からは、多数の裏込石が発見されたが、その中にも加工片は一片も混入されていなかった。この調査結果によっても、列石は採石地で完全加工された後に現地へ搬入されたのではないかということが考えられるので、今後採石地について再調査をする必要性を感ずるものである。

(四) 神籠石の主要施設

佐賀県および武雄市教育委員会発行の「おつぼ山神籠石」には、「神籠石の外郭線は土塁、水門、柵柱などの防塁施設が明らかになった。このような外郭線を持つ防塁には、郭内にも何等かの施設や建物があることと何人も考えるであろう。」と述べて、郭内に三か所を選定して調査した結果は、・・・何等の遺構も発見されなかったことが報告されている。ただ、神籠石と直接的関係のない石棺や経塚等はおつぼ山神籠石から発見されているし、帯隈山神籠石からも古墳・石棺・住居址などが若干発見されている。

昭和三十九年の帯隈山神籠石の調査では、列石線内部に五十八か所のトレンチを設定して調査が行われた。「帯隈山神籠石とその周辺」には、「神籠石郭内の施設については、おつぼ山調査でも気をつけたが、思わしい結果は得られなかった。帯隈山は調査区域が広範囲に亘るから期待をかけたが、予期したような成果はなかった。或る場所に柱穴群があり、土器片など若干を採集したが、神籠石の年代のものか疑問である。……郭内での発掘面積は、さまで広くはなかったが、一応建物の建ちそうな比較的平坦地を求めてトレンチを設定し

た。……五十八ヶ所のトレンチ堀開によって得られた資料は土器片の他はきわめて少ないことが知られる。そのなかで数ヶ所で土師器片が採集され柱穴らしい遺構も出ている。土師器の年代は後述の如く古墳期の初頭にさかのぼるが、小残片は各所から出ている。しかし直接住居址に関係がありそうなのは限られた数である。」と述べられていて、神籠石と直接関係のある遺構が内部から発見されなかったことが報告されている。

今度の調査では、この帯隈山の頂上とGH区南方の尾根との二か所を調査した。この二か所は、今度の調査区では最も平坦な地形をもつ高所であるため、相当に期待をかけていたのであるが、GH区南方のトレンチ内から数片の土師器片が発見されたにとどまり、遺構は遂に発見されなかった。これらの調査結果に基づき、神籠石の列石線内の広大な場所には何等の施設もなされていなかったという可能性が極めて強いようである。

埋まった列石には、人工的破損の痕跡がなく、全くうぶであり、木柵孔には補強や補充の跡がなく、全く一回限りのものであったことが推定される。要するに神籠石は、その文献的史料を欠くことと相侯って、ただ、外郭線が構築されたのみにとどまり、内部施設の構築や後の補強等は行われず放置された感を深くするものである。神籠石の主要施設は内部ではなく、土塁・列石・木柵をもってめぐらされた外郭線と、この外郭線上に連なる水門や門であったと断言することができるのではないだろうか。